

活躍する同窓生 出会いと縁を大切に

尾内 香さん
(五十三回卒)

平成二十八年八月、リオデジャネイロオリンピックが開催され、その中に日本代表選手を陰で支える同窓生の姿がありました。
現在尾内香さんは、山梨県に拠点を置くチームケンズでコーチ兼マネージャーを務められ、リオデジャネイロオリンピックでは、トライアスロン競技日本代表チームのコーディネーターとして参加されました。
今回、世界を舞台に活躍する尾内さんにお話を伺うことができたので紹介します。



リオデジャネイロオリンピックでの飯島健二(右)監督と尾内香(左)さん

昨年のリオオリンピックに トライアスロン日本代表の スタッフとして帯同したと きのことを教えてください。

オリンピックで採用されるトライアスロン競技は、スイム1.5km、バイク40km、ラン10kmの合計51.5kmを一人の選手が連続して行い、順位を競う競技です。トライアスロンでは、選手人数が五十五名、各国男女最大三名ずつ出場枠が与えられます。今回のリオでは、男子一名、女子三名の出場枠を与えられ、四名の選手が日本代表として戦いました。

リオデジャネイロオリンピックには所属するチームから佐藤優香選手が選出されました。私は、主に佐藤優香選手のサポート、そして所属チームの監督が日本代表監督を務めましたので、監督である飯島健二氏のサポートを中心に活動しました。オリンピックは、選手村に滞在し、そこからレース会場に行くというイメージがあるかもしれませんが、選手村からレース会場まで、車で移動すると二時間以上かかる場所でした。リオの交通事

情は良い方ではなく、渋滞も日常茶飯事です。そのことを考慮し、選手団は、レース会場付近にアパートメントを借りて、そこでレース当日まで調整致しました。選手村には入ることができない村外スタッフだったので、このアパートメントで、選手、スタッフとともに、レースまで万全の体制を整えました。当日になり現地に行けば、選手もできる準備はすべてやって来ているので、特別なことは何もせず、選手に対しては空気のよう過ぎることを心がけました。その他は、帯同してくださった栄養調理師さんの買い出しを手伝ったり、コースチェックを行ったり、時には選手にリラックスしてもらったために、笑いを取ったりもしました。たった二回きりの一発決勝。約二時間、選手が無事にフィニッシュできることを祈りながら、私たちが手を戦ってくれるだけというところまで、準備しました。レース当日は、選手の控えエントまでしか見送れないので、そこで選手に声をかけ、コース上に移動しました。

結果は、十五位と目標にし

前のロンドン大会について 教えてください。

初めてのオリンピックは、リオと同様の立場で、村外スタッフとして帯同させていただきました。その時は、所属選手二名が代表として選出されました。ロンドン大会は、震災の翌年に開催されましたが、オリンピックは前年から選考が始まっていたので、二〇一二年の震災当日も合宿に行っていました。私は揺れも体験することはないので、あの実家の様子さえも感じることがありませんでした。テレビで見るとは別世界の話のようでした。この時監督が「合宿を切り上げて戻っていいんだよ」と言ってくれたのですが、やっと繋がった両親との電話で、「こっちは大丈夫だから、やれることをやって」と励まされました。あの状況の中でその言葉をかけられる両親の偉大さを実感しました。その想いもあり、現地のレース会場に行っ

た時は、私が戦うわけではありませんでしたが、図々しくも選手に想いを乗せて送り出させていただきました。会場はすごい人数の観客が何重にも重なり、この中でレースをする選手はどんな気持ちなんだろう？と思ったのを覚えています。

高校時代について教えてください。

高校時代は、部活中心の生活でした。陸上部に所属し、専門である中距離でインターハイ出場、冬は全国駅伝に出場することを目標に取り組んでいました。残念ながら、思うような結果はついてきませんでしたが、ここで学んだ三年間が、今でも自分の人生の基盤になっていると感じることが多いです。当時お世話になった先生方には本当に感謝しています。私は高校時代、部活だけが楽しめた生徒だったと思います。大学四年生の時、教育実習で二ヶ月間お世話になり、その時受け持った授業や担当させていただいたクラスの生徒さんと一緒に歌った合唱コンクールは今でも印象深く、とてもよい思い出になっています。

高校卒業後は、東京都内の私立大学に進学しました。私は、以前から教員になることが夢でしたが、私が進学した大学は、陸上競技に力を入れているので、教員免許の取得できる大学でした。しかし当時は目標が定まっていたとは思っていません。今、私を支えているのは、間違いなく地元で過ごした日々です。まだ何かのカタチにしてお返しすることはできませんが、少しでも地元貢献できるように過ごしていきたいと思っています。

高校卒業後からチームケンズに所属するまでの経緯を 教えてください。

高校卒業後は、東京都内の私立大学に進学しました。私は、以前から教員になることが夢でしたが、私が進学した大学は、陸上競技に力を入れているので、教員免許の取得できる大学でした。しかし当時は目標が定まっていたとは思っていません。今、私を支えているのは、間違いなく地元で過ごした日々です。まだ何かのカタチにしてお返しすることはできませんが、少しでも地元貢献できるように過ごしていきたいと思っています。

現在の原高生に是非伝えたいことをお話しください。

私はみなさんに何か言えるような立場でも人間でもありませんが、こうして私がこのように機会をいただいたのも、縁があつたことだと思います。

普段競技以外の日はどの ように過ごしていますか。

チームの寮があり、高校生から社会人の選手とともに生活をしています。私は、選手ではありませんが、責任者というところで、一緒に選手たちと寮で過ごしています。選手が休みの時は、一緒に買い物に行くことが多いです。

現在の原高生に是非伝えたいことをお話しください。



チームケンズも出場した世界トライアスロンコスメタル大会



チームケンズ鹿屋市合宿(尾内さんは左端)



スレイドボー合宿の選手



スレイドボー合宿バイクトレーニング

この仕事に就くことができたのも大学の時にチームの監督に出会わなければ、今はありません。偶然や必然の出会いと縁を大切にしたいと思ひます。それを見逃さないために、感謝の気持ちや謙虚な気持ち、そして何より相手を尊重し、認めることがとても大切だと思っています。私自身、自分のことで精一杯になつてしまひ、反省する日々ですが、大切なものを忘れず、これからの目標に向かって、全力で進んでいきたいと思ひています。

私を含む四名のスタッフが参加しています。さらに、今回の合宿には各国のトップ選手を育てているコーチを招聘し、トレーニングを行っています。宿舎の近くには野生のカンガルーやウサギがいて、オーストラリアの大自然を感じていますが、今回ご指導をいただいているのは、フォーム改善です。大自然を感じてトレーニングをするというより、地味なトレーニングがメインです。地味なことはついポイントで見失ってしまつたりしがちですが、一見地味なことでも決められたゴールに向かって、コツコツと継続する大切さを、選手ではなくても学ばせてもらっています。